

教 育 委 員 会 会 議 次 第

平成 2 6 年 1 1 月 5 日 (水) 14:00
8 1 2 会議室 (小倉北区役所庁舎東棟 8 階)

1 開 会

2 案 件

(1) 協議① 「平成 2 6 年度 全国学力・学習状況調査報告書 (案) について」

(指導第一課長)

3 閉 会

教 育 委 員 会 （ 臨 時 会 ）

- 1 開催年月日 平成26年11月5日（金）
- 2 開催時間 14:00～15:00
- 3 開催場所 小倉北区役所庁舎東棟8階
- 4 出席委員 古城和子（委員長） 吉田ゆかり シヤルマ直美 伊藤一義 彌登 章
垣迫裕俊（教育長）
- 5 北九州市学力向上検証改善委員（代表）
福岡教育大学教授 坂本 憲明 井上 豊久 山元 悦子 清水 紀宏
北九州市PTA協議会会長 藤田 武男
あやめが丘小学校校長〔小学校代表〕 米田 敏彦
守恒中学校校長〔中学校代表〕 大坪 和廣
- 6 事務局職員 教育次長 岩淵 英司
総務部長 小澤 周三
学務部長 花本 潤一
指導部長 渡邊 義隆
教職員研修・企画担当部長 大庭 正美
生涯学習部長 宇佐美 健次
人権教育担当部長 大竹 順司
総務課長 平野 義人
企画課長 松成 幹夫
施設課長 佐村 良夫
指導企画課長 今村 剛志
指導第一課長 弥永 和利
指導第二課長 平池 秀幹
特別支援教育課長 入尾 忠之
教職員課長 太田 清治
学事課長 吉竹 直人
学校保健課長 安藤 光春
生涯学習課長 梅下 勝己
教育課程担当課長 河村 信孝
教育センター所長 太田 敦生
指導第一課指導主事 若松 英昭
指導第一課指導主事 幸野 英明
- 6 書 記 総務課庶務係長 田内 淳也
総 務 課 鈴木 忠之
- 7 会議の次第 別紙のとおり

教育委員会会議録（平成26年11月5日）

1 開 会

14:00 古城委員長が開会を宣言

2 会議録署名委員の指名

古城委員長が会議録署名委員に、伊藤委員と彌登委員を指名。

3 案 件

古城委員長／本日は、臨時会として、「平成26年全国学力・学習状況調査報告書（案）について」の協議を行う。本日は、北九州市学力向上検証改善委員の代表の皆様をお迎えしている。学識経験者としての専門的な立場からのご意見、保護者の代表としてのご意見、そして、学校現場の校長先生方のご意見を頂き、協議を進めていく。

これまで、10月3日の第1回学力向上検証改善委員会、10月17日の教育委員会会議、10月22日の市議会教育水道委員会、その3回にわたって議論を重ねてきた。これまでの意見を踏まえ、有意義な協議としたい。

(1) 公開案件

協議① 「平成26年全国学力・学習状況調査報告書（案）について」

本議案の内容を指導第一課長が説明。

〔説明要旨〕 以下の項目について報告

- ・平成26年度 全国学力・学習状況調査結果の分析総括
- ・平成26年度学力向上のための今後の取組について
- ・学力向上検証委員会での主な意見
- ・学力向上のための今後の取組
- ・全国学力・学習状況調査の内容および結果の概要と報告書（案）について

古城委員長／本日は時間も限られていることから、より有意義な協議を行うため、協議内容を次の3点に絞り行いたいと思う。

1点目は、各学校での学習活動など、これまで行ってきた取組の徹底について。

2点目は、これまで行ってきた既存の施策の拡充の中から、「子どもひまわり学習塾」の今後について。3点目、新たに取り組む施策として考えられている、本市独自の学力学習状況調査について。

以上の3点に絞りまして、協議を行いたいと思う。

まず1点目の、各学校での学習活動など、これまで行ってきた取組の徹底について、検証改善委員の先生方のほうからご意見を伺いたいと思う。それでは清水先生からご意見を述べていただく。

清水先生／専門は、算数、数学、教育学であることから、その立場から少し意見を述べさせてもらう。

このたびの学力テスト結果の算数A・B、数学A・Bを見ると、算数のほうはそんなに心配することはないと私個人は考えている。着実にこれまでの指導を徹底していけば、さらに伸びていくのではないかと考えている。ただ、中学校の数学のA・Bの全国との正答率の開きが少し気になる。したがって、ここはやはり、いま一度、基本の指導を根本的に見直していく必要があると思う。

具体的には、まず、これだけの開きがあることから、話をきちんと聞くとか、あるいはノートをきちんと取るとか、そのような学習規律がきちんと確立されているかどうか、不足していることがないかということ、具体的に見直す必要があると考える。

それから、指導法の工夫・改善というところが大事かなと思う。今の基礎・基本は大事だと思うが、今日的に学校教育法などにおいて、思考力・判断力・表現力・体力などということもいわれている。やはり、子どもたち、児童生徒に、思考力・表現力を付けるためには、子どもたちが考える授業、子どもたちが表現する授業、そういう授業にしていかなければならない。そういう点から、発問であるとか、あるいは板書であるとか、そういう基本的な指導も見直すとともに、表現力ということであれば、話し合い活動といったものを授業の中に入れていくと。資料3では、1時間の授業の中に1回は取り入れるというふうに具体的に挙げられていることから、そういう方向で推進していただければいいのではないかなと思う。

古城委員長／次に、学校現場としては、これからの算数及び数学の学力向上について、どのようにお考えかを大坪校長よりの意見を伺いたい。

大坪校長／本年度、全国平均との差が5ポイント程度下回っているので、非常に危機感を持っている1人である。

各学校全体で、中長期的な取組というのはそれぞれの学校等で行っていると思うが、私としては学力を上げるためには、いわゆる反復・継続の点が必要だと思う。その理由は、先ほど、徹底について印等が付いていたが、数学に関わる者としては、反復が必要ではないかということを感じていることにある。全国の学力調査の過去問等について、各学校で取り扱っているけれども、全市統一的に取り組めないだろうかということ、数学を専門としている校長先生方のご協力をいただいている。具体的には、現在、中学2年生の数学を教えている先生方に、冬休み等に集まっていただき、春休みに過去問を課題として出して、できたら4月にその課題を元にした課題テストを実施ができたかどうかということ、現在計画しているところである。

これは、あくまでも「こういうような課題がある、こういうような課題テストができる」ということを、全中学校のほうにお示しし、実施する、しないについては、各学校の判断において行なっていただくというものとして考えている。これにより、過去問に触れる機会が増えると考えている。

古城委員長／次に、山元先生のご意見を伺いたい。

山元先生／国語教育を専門としている。資料1の「学力調査の分析」の1番において、無解答率が全国よりも高いということが報告されているが、これは択一式問題とではなくて記述式である。すなわち記述の解答率が低いということである。つま

り、考えを書くというところで諦めてしまっている、そういった子どもの姿が報告されている。

ではどうすればいいのかということの手掛かりとして、報告書案の65ページにおいて、正答率が上昇している学校の事例を挙げていただいている。これは、非常に貴重な資料だと思う。具体的な、効果的な取組のところをピックアップしてみると、65ページに、小学校の授業の中に「話し合い」と「書く時間」を設定した取組を徹底していたり、各教科で表現や説明といった、話すことを通じた表現活動を徹底していたり、音読を毎日徹底したりしているというようなことが、効果を上げている学校の事例として紹介されている。

過去とあわせてみると、66ページの学校は、各教科等の時間に「書く」活動を積極的に位置付けて、発表や説明する活動を設定している。学習のまとめに、自分の考えを短く書くというのを設定している。67ページの学校では、国語科だけではなく、学級活動などで話したり、書いたりする、そういった活動を入れているという、非常に共通点を感じさせるような取組が紹介されています。

言語活動の充実とかということがよく言われ、そして現場では言語活動、単元の活動に表現をおくということ、わりと一般的に工夫している。しかし、むしろ、毎時間、教室で常に行われている、聞いたり、話したりする、そういう時間と空間こそが充実した学校の言語活動の場だと考えて、自分の考えを話したり、聞き合ったり、さらにそれに返していったり、そういった授業を行い、授業の最後に、考えたことを短い言葉で書く。これらのようなことが日常的になることにより、効率的な学力を育て、結果的に解答率が上がるようになってほしいと思う。

つまり、書くことの大切さというのは分かっているが、それが学力テスト問題で、200字以内で、何秒で書けというものの練習ではなく、もっと根っこにある考える力、論理的に考えてそれをすかさず話すということが日常にあれば、結果としてテストの時に、何秒かで書くというところにつながるのではないかと思う。したがって、形式の練習で学力アップではなくて、本物の学力を付けるための授業改善というのを提案したいと思う。

古城委員長／次に、井上先生に伺いたい。

井上先生／私も検証改善委員会は7年目に入らせていただくが、なかなか北九州市は平均点が厳しい状況ではあると思う。これは、1つは他の市町村もご努力されているという中で、向上策を講じながらの上で、ということ。

もう1つは、私も学校等、幾つか回らせていただいて、全般的に先生方の学力向上に対する意識は高まってこられているのかなという感じはする。そして、本日あったように、さらに徹底していくということが非常に課題かと思う。そうした中で、資料1の分析の総括4と5というのをご覧になっていただくと、この点が、北九州市の一つの大きな課題であると思う。

1つは、家庭学習の絶対量の不足である。これも数字的には明確に出ている。2つ目は、メディア接触の時間。3つ目は、これまでの取組も、小学校より中学校のほうが少し弱いという点。ただ、メディアとか携帯に関しては、北九州市はパンフレットなども作って早くから取り組んではいただいております、学校のこういった徹底と同時に、やはり家庭学習に対する、基本的なところをどう改善していくかということが大事だ。

「チャレンジハンドブック」というのは、生活習慣を見直して、保護者自身が家庭学習に関する関心とか、重要性というのを感じていただくというものである

が、内容的にも非常に分かりやすい形で示していただいております、こういう取組は素晴らしいのではないかなと思う。これをどう活用していくかということが課題だと思う。中心はやはり家庭学習であるので、生活習慣や家庭学習について先生方が体系的な指導といった連携をしながら、家庭の方で進めていただければと思う。

ただ1つだけお願いしたいのは、やはり学校での勉強量が少し増えていますので、さらに家庭で押し付けのように家庭学習をさせると、後々、もしかしたら勉強嫌いの子どもが出てきてしまうので、少しご留意しながら、いい形で家庭の学習生活習慣を付けてほしいと思う。

古城委員長／それでは、2点目のこれまで行ってきた既存の施策の拡充の中から、特に「子どもひまわり学習塾」の今後について、検証委員の先生方からご意見を賜りたいと思う。まず、井上先生伺う。

井上先生／資料1の1、2からわかるように、1つは無解答率が少し高い。それから、正答率が低い層が多いということは、基本的な基礎学力が付いていない子どもたちが多いということがあるので、そういった子どもたち一人一人に合った学習の支援が、今後必要になるのではないかなと思う。したがって、「子どもひまわり学習塾」に対する期待は大きいかなと感じている。家庭の状況が非常に厳しい子どもたちも見られた。「子どもひまわり学習塾」においては、勉強と同時に、子どもたちと寄り添う形でご指導していただければと思う。

古城委員長／それでは、次にPTA協議会の藤田会長に伺う。

藤田会長／「子どもひまわり学習塾」は、保護者の立場としてすごく助かっている。北九州には様々な家庭がある。なかなか塾に行けない子どもたちも、ここで予習・復習してから帰れる。現在、小学校が31校で、中学校が10校ということで、今後、拡充してほしいと思っている。

また、保護者にも周知をしていかなければいけないのかなと思っている。

古城委員長／次に、3点目に入らせていただく。「新たに取り組む施策」として、本市独自の学力学習状況調査を検討しているが、検証改善委員の先生方のご意見を伺いたいと思う。

まず、米田校長先生に伺いたい。

米田校長／今、現場では、喫緊の課題として向上に努めており、毎年、学力向上に向けて学力向上プランを各校一生懸命に練って取り組んでいる。当然のことながら、各年度の全国学力状況調査の結果を踏まえてということで取り組んでいくわけであるが、次年度、さらにその次の年というふうに、経年的に自校の取組を検証しながら進めいく。

その際に、これまででは、なかなか4年生の結果を5年生に上げての指標づくりというのは難しいものがあり、各校で5年生独自の調査を行うなどして対応していた。

今年度、今後の取組として、新規に本市独自の学力状況調査を行っていただけるということは、現場も非常に難しい課題を解決する方向性示していただけると感じている。しかも、4、5年生と経年的に扱っていただけるとなれば、連続した観点から、次年度の学力向上プランを立てることができると考えている。CRT観点別到達度学力検査とは、若干中身が違うというところで、より授業に則した形の調査がしていただけるのではないかと、非常に期待を大きくしている。そして、我々の役割としましては、これを日頃の授業に、いかにいかしていくか

ということだろうと思う。特に、小学校は本当に基盤づくりであるので、そのような点を、このテストの調査結果を基に進めていこうと思います。

現場は、学力状況調査で求められている学力そのものが学習指導要領で求めている、重視している学力だということを踏まえ、授業構成を考えていかななくてはいけないと考えている。したがって、例えば、考えるといった時間の後には身に付けたものを活用する時間を確保する、あるいは、子どもたちの学習を充実、安定させるための学習規律の徹底をするといった、各校がしっかりとした指標を持ったうえで、授業の改善に進めていくこと重要であり、本市独自の学力調査を行うことによって、この改善がより効果的に行えるのではないかと思います。

古城委員長／それでは次に、井上先生、よろしいでしょうか。

井上先生／先ほど申し上げたように、7年間、検証改善委員会で提案とかささせていただいていたが、学力向上は厳しいという状況が実態としてあった。そうした中で、今回は特に家庭学習等にも力を入れていただくということなのだが、やはり、考える力、応用の力も付くような、成果が見える形で示していくということであれば、やはり独自の学力状況調査と、全国学力・学習状況調査と合わせ、方向性の知見をしていくことも大事ではないかなと思う。ただ、そのためだけに学習をすると、課題の部分も出てくるので、専門の教科の先生がおっしゃったようなところをきちんと踏まえながら、進めていただければと思う。

古城委員長／次に、坂本先生、伺いたい。

坂本先生／独自の学力テストの作成については、先日の検証改善委員会では、ぜひ取り組んでやってほしいという結論に至ったが、その前提として、やはり学力一般で、基本は子ども、子どもがメイン。それと、その学校にいる先生、当然ですけれども子どもの保護者、この三者の関係。その三者の関係に、教育委員会がどう施策を打ち込んでいくかということになると思う。

それで、学力向上といっても、簡単な要因だけではなく、さまざまな環境要因があり、やはり北九州市独自の要因があると思う。資料のほうを見ると、かなりデータを分析されていて、昨年度の資料よりも十分細やかになっていると思う。

そういう背景の中で、少し新テストのことを述べたいと思う。1つ懸念材料は、学力テストを解けるための学力。つまり、テストのための対策のテストで終わってしまわないかという懸念はある。やはり学力を考えた場合は、どんな学力を付けさせたいかということを十分に検討する必要があると思う。そして、それを実現するための目標の設定。目標を設定したら、それが浸透していくように打ち込んでいかないといけない。ただ単に、新しいテストをやりましたよということだけでは、消化をしてしまうだけで、本末転倒な話になってしまい、学校の先生は、またこんなことをするのかという負担感だけが残るようになってしまいかねない。

本来ならば、各学校で取り組めることは何か、そして、一つ一つの学校が設定したことに対して、生徒を検証し、それを、本当は3年、5年程度の、中長期的な目標の中で学力向上を行なっていくことが、私は一番いいと思う。しかし、検証改善委員会の結論としては、まず、先生方にも、共通意識を持っていただくには、新テストというのは非常に大事であり、行うことは有効ではないかと思う。

したがって、先生方、学校に投げかけていくときには、きちんとコンセプトを持って行うことが重要であると思う。学力と言う大きなものの中に、「一つの問題を解く力」があると思うが、その中でも、特に考える力を伸ばすということがコンセプトになっていくと思う。そのようなコンセプト、位置づけを明確にして、

テストを行っていかないといけないと、私は思う。

山口県教委が、2008年から先行的に対策テストをやっていて、県の平均が上がったという事例がある。しかし、先ほど申したように、テスト対策だけでは長続きしないだろうと思う。ただ、全国でもいろいろな教育委員会の取組があるので、さらに検討していきたいと思う。

文部科学省も、出題意図、解説を、ネット上で公開しており、その資料に基づいて、先生方の授業力をアップしようというところが、全国学力・学習状況調査の狙いでもある。本当は、学校が自ら動いて行えればいいのだけれども、難しい面があると思う。

次に、その他ということで、私を感じるところを、少し述べたいと思う。

まず、「ハードとソフトの両輪とは」と、定義をしていかないといけない話なのではないかと思う。学力テストの作成というのは、ソフト面。ハード面としては、やはり学校の荒れ、それと問題行動を起こす子どもであるとかの特別支援教育。学校の先生は、本当に日頃、努力されている。その子に関わって、なかなか自分の教材研究ができない状況も存じ上げている。校長先生も悩んでいる。そう行ったことに対する支援というものを、予算化して、本当は打ち込んでいく必要があるのではないかと思う。

北九州市は無解答率が多いということで、本当は低学力の子どもさんに対策を講じないといけないはずだと思う。家庭教育というのは、特に低学力のお子さんには限界がある。したがって、ひまわり学習塾を拡充することが重要になってくると思うが、同時に、そのハード面、地域でそのような指導者が確保できるのかということも、現場の校長先生とかに確認しながら、やっていく必要はあろうかと思う。

トップダウンに、北九州市が学校のほうに落としていくのか、それとも1つ、学校でできることを上げていくのかという議論は、今後必要になるかと思う。学校がうまく機能するように、私たちもできるだけ関わっていききたいと思う。

古城委員長／それでは、内容につきまして、教育委員の方々から質問及びご意見を伺いたいと思う。

吉田委員／この調査結果から、今後の計画を通して、これがうまく実施できたら、ほんに上がっていきだろと思う。私は、勉強が好きな子、体操が好きな子、いろいろな子どもたちがいると思う。体操の好きな子でも、子どもが考えて表現する力というのは、運動面でも絶対必要になる。例えば、自分の、今日の振り返りをきちんと書いて、ここを改善しようという、スポーツの中での改善点ということにもつながっていくと思う。そのような活動を通して、いろいろな意味で成長できると思う。だから、学力向上は、彼らの能力全体を引き上げるということにつながっていくと思うので、私たちは自信を持って、これをやっていこうと思っている。

その中で、清水先生にお伺いしたい。子どもが考え、表現する力を付けるということが、一番大事だとおっしゃっていたが、今までやってきたことで、それをするために何が足りなくて、どうしたらいいのか。お考えをお聞きしたい。

清水先生／私も北九州は、特に小学校を中心に、授業をよく見せていただいている。それで、学校によって、あるいは先生によって、多少差はあるけれども、端的に言うと、授業の場面で考えさせること、表現させることが、まだ足りない。先生方は、例えば算数の場合、問題を出して、解説をさせていると、あるいは発表させてい

る。ところが、一部の子どもだけが自分の考えを発表し、それをみんなが聞いているという授業がどうしても多い。

ですから、Aさんが発表したことに対して、その他のBさんやCさんが足りないところを補うとか、分からないところを見つけるとか、もっと上手な表現方法で説明するというふうに、Aさんの考えに、BさんやCさんが関わってくるような授業を展開していくことで、クラスのより多くの子どもたちの思考力であれ、表現力が育つのではないかと思う。授業改善の余地が、私はまだあると思っている。

それは、全ての授業が悪いというのではなくて、今やっている授業をベースに、より一人でも多くの子どもたちが、授業中に思考し、判断し、表現するという、そういう授業を磨いていくということだと思う。だから、0か100かということではなく、今あるものをより良くしてほしいということ。地道なことであるが、それが一番ということかなと思う。

もう少し述べると、子どもが何か意見を言って、不十分なときに、どうしても先生が言い直してしまう。不十分な考えを子どもが表現したときに、先生はプロですから、その子どもの気持ちがよく分かる。それを、先生の言葉で言い換えてしまう。そこは、絶好のチャンスで、その子にもう1回表現させる。そうすると、前より、より良い表現になる。そこが、その子の表現力が上がる瞬間となる。あるいは、その表現を聞いた、ほかの子どもに「今の、もっと上手に言えないかな」と問うてみる。そうすると、そのほかの子がもっと上手に言う。そのときに、その子の表現力が上がる瞬間となる。それを先生が奪ってはいないかというところも、少し検討していただければなどと思う。そういう意味で、指導方法の改善というのは、絶えずしていかなければいけないのかなと感じている。

シャルマ委員／2点感想と、1点質問です。

感想は、本市独自の学力・学習状況調査の実施について、学力テストのための学力にならないようにという点は、同感である。そもそも、この学力テストが何のために行われているのか、そこがぶれたらいけないと思う。

もう1点は、学校の荒れや特別支援教育への対応ということを大切に考えていくことが、学力向上のための一つの大きな柱になるということも、共感した。

山元先生に1点お尋ねしたいと思うことがある。先生がおっしゃった、考え、書く力ということが本物の学力を付けていく。そういうことを授業の中ですることが、本物の学力のための授業改善になるということについても、私も非常に同感である。

全国学力・学習状況調査の59ページの「(1) 授業における徹底」のオの部分です。無解答率の差があるとか、あるいは、書く力が北九州市の子どもたちは弱いといわれているが、「オ まとめ(振り返り)の時間を5分確保する」という、ここで書く活動、表現する活動というのを充実していくことで、その書く力をアップさせることにもなるのではないかと思うし、実際、いろいろな取組事例の中でも、書くことの活動に力を入れた学校が、比較的、子どもたちの力を付けることができているというふうに、この冊子の中でも紹介されており、このまよめの5分の積み重ねということの大切さを感じている。

振り返りであるから、その1時間の中の要点をつかむ。それで、自分はどうなのか、どういうふうな思いを持ったか、そのようなことが表現できるというかなと思うが、ここの何字以内で書くとか、何々の言葉を使って書くとかという例が書

いてあるけれども、私はこういうことを子どもたちができるようになってくると、よりコミュニケーションの力につながってくるのではないかなと思っている。

そこで、オの4番目に「学習を振り返らせ、子ども自身に自己評価させる」というのがあると思うが、私の個人的な意見としては、もっと自己評価というより、自由な表現ということを中心にしたいほうが、より子どもたちの書く力につながっていくのではないかなという印象を持っている。この点について、先生のお考えをお聞きたい。

山元先生／まず、共感いただいた点について述べたいと思う。

授業自体が、子どもが友達の考えを聞いて、自分で考えて、それを表現する。そういうサイクルで回っていくような授業が大事だと思っている。それをキーワードでいうと、先生が何かを教えるのではなくて、先生はそれぞれの子どもの考えをコーディネートする。そういった「教師の指導性のイメージを変えていく」ということを、スローガンにしたらいいかかなと思う。

次にご質問のあった点についてだが、教師が子どもたちの考え合う姿勢のコーディネーターになるという本質が資料に書いてあれば、もっと、今いただいた質問の解答になるのかなと思う。

友達の意見を聞き、話し合っ、自分の考えをまとめて振り返るという、自助・公助は非常に大事であり、それは自己評価という、できた、できてないと自分を対象化するわけではなく、ここは分からなかったとか、ここはよく分かって100点だったとか、そういった漠然としたものを言葉でつかんでいく時間という意味で「自己評価」としている。ちょっと言葉を変えたほうがいいかなと思うが、そういった振り返りの時間は大事だろうということではないかなと思う。

伊藤委員／坂本先生のご意見に、全く同感で、本当に私もずっと思い続けていた。検証改善委員会の皆さんと一緒だなということを感じた。

ひまわり塾のことについて、少しご質問したい。

今、「子どもひまわり学習塾」を行っているのが、それに対する現時点での成果や、またこれから増やしていく中でも改善点、それから指導員の確保等で、どういう形で進めていくのが一番いい形なのかということについて、ご意見を伺う。

井上先生／私の専門が社会教育というか、生涯教育であることから、そちらも含めて申し上げさせていただくと、やはり計画の基礎とか学習規律とかもあるが、やはり生活習慣とか、健康の問題などが根本にある。勉強を教えるだけではなくて、そういったところも含めて、もう少し全体を見てくださる指導員を置くというような、そういう視点も必要かなと思う。

北九州市の場合は、スクールソーシャルワーカーを少しずつ増やしていただいているので、全体的にもそういったところは進んでいると思う。ただ、学習塾は基本的に拡充していただく方向で、一人一人をしっかり見ていただくという体制を整えていくというのが、やはり大事ではないかなと思う。

今後の形としては、当然、民間の学習塾とは違うという特色を出していく必要があると思う。これは、まだ始まったばかりであるので、なにが正解かということは申し上げられないが、検証しながら少しずついい形にしておき、PTAとか保護者等の連携とか、地域との連携を強くしていくことが大切なのかなと思う。生活で言うと、メディアの接触時間が長い子は厳しいというのは明確に出ているので、そういう点を協力していけたらいいのではないかなと思う。「子どもひまわり学習塾」も、保護者、地域との連携が不可欠と感じているので、啓発も含めて進め

ていただければと思う。

大坪校長／ひまわり学習塾について、拡充の方向で学校現場では是非進めていきたいなと思っている。子どもたちの学力向上を考えると、先ほどシャルマ委員からご意見頂いたが、まず、授業が勝負というところで、私ども教員は、日々、研究し、子どもが本当にできる、しっかり考える、一人一人が力を付ける授業というものは徹底している。ただ、その中で、いろいろな家庭的な事情や、その子ひとりの育ちの中で身に付けたものの違い、さまざまな状況がある。それに沿って、本来では少人数授業ということで、習熟度別であったり、課題別であったり、子どもたちのさまざまな背景に応じて、さらに補充・拡充していくといったときに、ひまわり学習塾の存在が、非常に効果的になるのではないかな。

もちろん、これが学習習慣付けをするということだけではなくて、塾との違いというところで、学校と連携した、少しでも子どもの課題が見えている状態でのひまわり学習塾の展開というのが、恐らく理想的であって、一人一人の子どものニーズに応えるものになっているのではないかなと考えている。

藤田会長／私は、花尾中学校の出身で、子どもも花尾中学校に行っている。今、3年生たちがこのひまわり塾を行っている。花尾中学校では、1、2年生を対象に、花尾塾というのを、校長先生とPTAと立ち上げてやらせていただいている。その指導員というのは地域の人からボランティアを募ってやっているのだが、学習とコミュニケーション力を高めようということで、校長と話をしながら、やらせていただいている。

今、1、2年生はひまわり塾をやっていない。そのため、小学校から中学校に上がったとしても途切れてしまうということもある。そうならないようにと、校長と話をしたうえで、1、2年生もできるだけ3年生の時に入りやすくなるように花尾中学校はやっている。

そういうことが、少しずつでも広がっていけばというのものもあるし、ひまわり塾の拡充を進め、周知し、学校と地域でうまくやっていくということが現在の目標です。

伊藤委員／こういう学力向上というキーワードの中で、学校と保護者と地域と、そして教育委員会と、こういった形で話ができただことは、とても素晴らしいことだと思う。これをきっかけに、北九州の子どもたちのために、みんなで心を1つにして頑張っていこうというような、そういった形の流れになってくれればいいなと思う。

古城委員長／最後に教育長から、今後の取り組みについて伺いたい。

垣迫教育長／今日は、検討委員の先生方、そして、教育委員の方に、いろいろご提案、改善方を協議していただき、本当に感謝している。

この4月から、学力とは何かと考えることが多かった。生きる力はいろいろあるのに、学力だけでいいのかという点について、引っ掛かったこともある。しかし、この学力テストの問題というのは、見れば見るほどよく考えられており、特にB問題などを見ると、これはいろいろな力を試されているなど、いろいろな子どもたちの力を図る、かなり総合的な判断指標になるなと思うに至った。子どもたちのいろいろな可能性を広げるには、このテストをしっかり取り組むことが大事なことだと思いに至った。

私は、学校訪問として各校回っている最中なのだが、小中だけでも全部で200校近くありまして、3分の2くらい回った。そうすると、各校のいろいろな要因がそれぞれあり、各個別の解決策があるだろうなと思うようになった。

そもそも学力とは、何によって規定されるのだろうかと議論していると、今回の57ページに図があるが、先生の授業のやり方、指導方法、当然ある。また校長なり、教頭なりが全体をどう持っていくか、教職員の意思統一の問題であるとか、あるいは勉強時間をどうつくっていくかだとか、校内の掲示物一つ取っても、各学校かなり違う。さらに、そもそも家庭の生活習慣という問題もあるし、厳しい見方をすると、文科省が、いわゆる家庭の社会的、経済的状況との関係もあると指摘されている。

いろいろな事情がある中で、しっかりやっていただいていると思うが、先ほど坂本先生から、トップダウンかボトムアップかとあったが、私どもとしては、全体としてベースで、これはきちんとやろうというところは、まずトップダウンでもいいかなと思っている。各校事情がすごく違うというのを本当に感じおり、その点は、やはり学校の工夫で、ボトムアップでやってほしいと思っている。

予算の制約もあり、市長にご理解を頂かないといけないところもたくさんあるが、より子どもたちの未来のためにしっかり真の学力を身に付けてもらう、そして、社会に出ていただく、高校に進学してもらうという思いで、事務執行責任者として取り組んでいきたいと思う。

古城委員長／本日の意見を参考にし、報告書の内容を精査して、本市の学力向上に向けた施策についても、着実に進めていきたいと思う。

協議終了

4 閉会

15:00 古城委員長が閉会を宣言。